



7月に第2子を出産予定。自身が10年前に設計した実家に、両親、夫、2歳の長女と暮らす。「生活や子育ての経験は仕事の強みになっていると思います」



施主のイメージを形にしていくのが設計の仕事。写真は酒井さんが手掛けた住宅の一例



仕事と真摯しんじに向き合い、
生き生きと働く女性たちに話を聞きました。

取材・文／亀山康江
写真／梅沢春子（2〜3P、5P）

一級建築士

酒井
友美さん
Sakai tomomi

1979年生まれ、見附市出身。新潟大学工学部建設学科卒業。長岡市の高田建築事務所に勤めながら一級建築士資格を取得。2007年から設計業務に就き、現在は設計係長。



想い描く夢を 形に家づくり

高田建築事務所に勤める一級建築士の酒井友美さんが、これまでに担当した住宅は100件近くになる。2001年の入社から数年間は、家づくりの仕上げになる壁紙や照明などインテリアコーディネートを担当。「自分が設計する側になるとは、思っていなかった」という。

転機は、中越地震の後に建て替えた実家の設計を手掛けたことだった。「初めて1人で設計したんです。当時は両親と姉と私の4人が暮らす家。姉か私が結婚して子どもが生まれたら将来は2世帯でも暮らせるようにとか、間取りを決めるところから自分で考えました」

05年に完成のこの家で、設計の楽しさに目覚めたのだとか。もっと勉強してみようと、終業後や休日に学校に通い、難関の一級建築士試験に挑戦し始める。「何回も落ちて、合格したのはちょうど30歳のとき。資格を取れたことが自信になりました」

注文住宅は1軒1軒設計が全く異なる。何度も打ち合わせを重ね、施主が思い描くイメージを形にしてゆく。「打ち合わせは3カ月とか長期にわたるので、お客さまと一緒に一から創り上げる感じです。要望に沿いながら、お客さまが思う以上の提案ができてこそ、感動がある。家が完成して、夢が形になったと喜んでもらえるのが一番うれ

しいです」

今、家を建てるのは自身と同世代が多い。女性の生活感覚や子育ての経験は仕事の強みになっていると思う。7月に第2子を出産予定のため、これからしばらく職場を離れる。「自分が経験を重ねるにつれてお客さまの年代は若くなってくる。若いスタッフに刺激をもらいながら、デザインが古くならないよう私も頑張らないと」。やりがいのある設計の仕事は、2児の母になった後も続けたいと思っている。

高田建築事務所

長岡市栞田屋 5-6-22 TEL.0258(36)1230
<http://www.takada-arc.com/>

(撮影:高田建築事務所)